

連用形に続く助動詞

中 田 祝 夫

小松 登美

伊牟田經久

小林 芳規

はじめのことは

連用形に添加する七つの助動詞の解説を書くつもりになつてから久しくなつたが、運悪く、この春から秋にかけぶつ通しで急がなくてはならない手間のかゝる仕事が始まつた。よつてこの稿の方に一日すら費すことができないように予測されたので、小松・小林・伊牟田三氏に援助を乞うたのである。最初の編輯部との約束では、少し詳しく拜見して意見を開陳するはずであつたが、急ぎの用事のためにそれすらできない。ただあら／＼拜見して所々句読字句の変更を願つた。それで自分のなし得た事は、三氏に仕事の分担を割りあてた一事と少々数行ぐらいを補つた程度にすぎない。しかし最初の約束なので、署名するはめになつたが、汗顔の至りである。各項の執筆者の名は、項の最後にあるから、注意して混雑しないで頂きたい。

(中田祝夫)

以後は文章語として命脈を保つこととなつた。この間に、この助動詞の意味・用法に時代的変遷のあつたことは当然想像できる。記述に際しては、最も用例の多い、また旧くから研究されてきた平安時代の例から考えて行こう。なお、ちなみに「けむ」は奈良時代は、仮名の通り「目」と発音されたはずであるが、平安時代に入つて「目」になつたようで、十一世紀に入ると、さらに「目」と発音されたのではないかと思う。ただ、推量の助動詞「む」「らむ」が、「う」「らう」となつたように、「けむ」も並行して「けう」の形をとつたかというに、この場合はそうはならなかつたらしい。あるいは比較的早く口語から距つたために、「む」「らむ」に比して、崩れが少かつたのではないかも考えられるがどうであらうか。

語性

「けむ」を過去推量の助動詞とすることについての通説に對して、根本的な異説のあることを自分は知らないが、その詳細な用法については見方に少異がないわけではない。富士谷成章の「脚踏抄」をみると、「けむ」を、

(1) 里(私注、口訳)「タコトデアラウ」「タモノデアラウ」ま

けん

「けん」は早く上代の記紀歌謡に見られ、以後、奈良時代、平安時代には盛んに用いられたが、鎌倉時代を過ぎると日常口語からは遠ざり、それ

た「タデアアラウ」といふ。

(2) 過ぎたることを思ひて「ける」などもよむべき所を、我ま
さしく見ず聞かず知らずなどあれば、くつろげて「ん」とひ
びかせり。是れ古人の詞のくはしきなり。

(3) 句の末にあれば、上にうたがひの挿頭・脚結（私注、疑問
の副詞・代名詞、か・やなど）を受けてうちあふこと（私
注、呼応係結などの意）……すべて『将倫』の「らん」に同
じ。（注意、引用の部分に、原版本の字面に手を加えてある）
と説いている。（1）は訳語であるが今日でもこれはそのまま従つ
てよかう。（2）は意味を述べている。傍線の言葉より思うに、
話し（言語主体をこう呼ぶこととする）が直接経験しない過去の事
がらに想像を加えた表現として考えているのである。ところで、話
手が想像的に判断する過去の事がらといへば、まず（イ）目の前に
ある事実により（その結果などを手がかりとする）、想像する場合
があり、（ロ）伝聞（広く書物などによつて知つた場合も入れて）
によつて過去を想像的にいう場合がある。（ハ）さらに、話手の直
接経験した事がらについても、後になつてそれを想像的にいう場合
ということもある。

(イ) によつて過去の事がらを想像的に判断した場合は、
夏山に恋しき人や入りにけむ……タデアアラウ
声ふりたててなく時鳥
（イウ）
の場合である。「声ふりたててなく時鳥」の眼前の事実によつて、
その原因となつている過去の事がらを想像したのである。（現在
の事がらの想像には「し」を用いる。）

(ロ) は他から伝え聞いたり、書物を読んで知つたりした過去の
事がらを想像的推量的に判断した場合である。

殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女君のかかる処に

やありけむ……タデアアラウ……などまづ思ひ出でらる。
契りけむ……タトカイウ……昔の今日のゆかしさにあまの河波うち出で
つるかな
（以上、夏歌）

は、伝聞、書物で知つた源氏物語の事柄について、想像的に言つた
のである。後者は長恨歌に拠つている。この点いわゆる伝承回想の
「けり」が過去の事柄を伝承のままに表現するのは相違し、「け
む」はその事がらに話手の想像的判断が加えられているのである。
平安時代の物語などの多くの「けり」に交じつて「けむ」の用いら
れた例を検討しても明らかである。

昔をここみちのくにに……すずろにゆきいたりけり。そこなる女、
京のひとはめつらかにやおほえけむ
（伊勢）
彼処の漢詩作りなどしける。厭かずやありけむ。二十日の夜の月
出づるまでぞありける
（土佐）

以上は「脚結抄」の「我まさしくみずきかずしらず」ある事柄の想
像であるが、（ハ）自己の実際に経験した過去の事がらでも、無意識
的の行為、記憶の不確実など特殊な場合としては想像的に表現する
ことは有りうるわけだ。

君や未し、我や行きけむ思ほえず

夢か現か ねてかさめてか
（夏歌）

さやの中山など越えけむ程もおほえず、いみじく苦しければ……
（夏歌）

などの場合である。要するに、「けむ」の意味は、過去の事がらの
（それがどんな方法で知られたものによつて、右のイロハより以外の
場合もあるが）想像的推量的判断にあるといえよう。

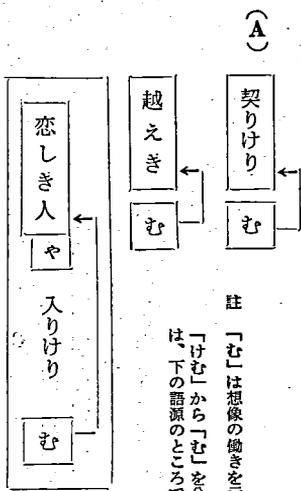
次に語形の上から見ると、次の二つの形式が見出される。

(A) 疑問語をとまなわぬ場合

(B) 疑問語をとまなつた場合

(A) は、想像する事がら、 「けむ」を含む文節（意味的に関係する連文節のこともある）の用言の表わす事がらという場合である。前掲の例の「契りけむ」「さやの中山など越えけむ」がこれだ、想像しているのは「契りけり」「越えき」（「契ツタカ、ドウカ。」「越エタカ、ドウカ。」）である。

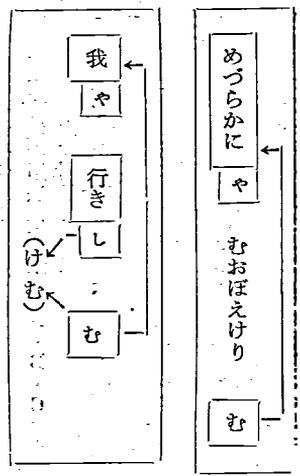
(B) はこれに対して、想像する事がらは、疑問語を含む文節（または連文節）の表わす事がらである。したがって「けむ」の添加したところの上の用言の表わす事実は、想像の余地のない明白なことがらのある場合である。少くとも「けむ」と推量する中心意味は上の用言にあるのではなく、さらにその上の疑問語をもつた文節（または連文節）であるといえる。前掲の「恋しき人や入りにけむ」「京の人はめづらかにやおほえけむ」において、「入りにけり」「おほえけり」は心に推量するところの中心対象ではなく、「入った」のは「恋しき人（デアルカドウカ）や」「おほえた」のは「ドクナニ」（めづらかに）や」というのである。この場合、疑問の助詞や疑問の語がその想像の対象を一層はつきり示すのに役立つていると見られる。今(A)(B)を図示して比較すると次のようになる。



註 「む」は想像の働きを示す。
「けむ」から「む」を分離して考えること
は、下の語頭のところ説いた。

此沙弥ハイカナル不死薬ヲカ服シケム〔法華百座聞書抄・天仁三年〕
元来想像の対象は疑惑をもつものであることが多いものである。
したがって「けむ」も疑問語と共に用いられる(B)の例が極めて多い。(例えば竹取物語では七例中六例まで、土佐日記では六例中四例まで(B)の場合である。なおこれについては松尾拾治郎氏「助動詞の研究」に詳しい。)

我父君ハ何国方(を)指(し)テカ(而)往(たまひに)ケム〔東大寺飄語文稿・平安初期〕
奥山の紅葉の錦ほかよりもいかにしぐれて深く染めけむ〔寛政〕
は「深く染まつた(染めけり)」事実について「いかに」とその理由を想像しているのである。以下も同様に考えられよう。
をぐら山にてなに求めけむ〔竹取〕
何さまで思ひ出でけむなほざりの木葉にかけし時雨ばかりを〔寛政〕



しかし、ここに第三番目の形式(C)がある。それは(B)と同様に「けむ」の添加する用言の意味は明白で想像の余地がなく、それを越えて上の文節の意味を推量想像しているにかかわらず、(B)のように疑問語でその対象が示されない場合である。想像の対象が常に疑惑的なものと限らないからこのような表現も考えうるところである。

あしからじよからんとぞ別れけむ

なにか難波の浦は住みうき

逢ふまでの形見とてこそ留めけむ

浪に浮ぶもくづなりけり

右の「別れき」は既定の事実であり、「留めけり」もその詞書(親の種人の女にいと忍びて逢ひて物ら言ひける間に、親の呼ぶと)から事実であることが分る。想像の対象は、上の傍線の語であり(「別れた」のは「一よからんと思つてであるう」。「留めた」のは「一の形見と思つてであるう」の意)、(B)にならつて「ぞ」「こそ」の位置に「や」などの疑問語があつても通する所である。この(C)の場合、その対象を明示するためには多く係助詞(副助詞)などが置かれている。しかし何ら助詞の用いられないものもある。

よそにのみきかまし物を音羽川

渡るとなしに△みなれ初めけむ

「みなれ初めき」は事実であり、想像しているのは「渡るとなしに」である。(B)および前例に従えば△点の所に疑問の「や」か係助詞のある所であるう。宣長がこの歌を解して、

何とて渡るとなしにみなれそめけんという意也

「何とて」を補つて考へているのは、(B)の疑問語とある例が多く、そのため中世以後使われた用法(中世のてには研究では専ら疑問の意に呼応する)と考へた。またロドリゲス「日本文典」にも「Queen」(け

ん)は疑問の語と共に使われる。即ち疑問の助辭が先行する(土井忠とあ)から結論された誤解である。成章も宣長と同様に考へたらしく、前掲「脚結抄」の(3)がよくその事情を語っている。この点、時枝誠記博士が「らむ」について述べられたことと軌を一にする。(日本文法、文語篇、一八二頁)

右のように、「けむ」の本質の意味は「過去の事がらに対する話手の想像的判断を示す」にあるわけであるから、「けむ」そのものに疑問の意があると考へたり、(C)を疑問語の省略と考へるのは本末顛倒であらう。

次に婉曲表現について。一般に推量の助動詞(む・らむなど)には言い方をやわらげるための表現がある(主として連体形に)とい

われる。「けむ」にも例えは次のような例である。

「へんぐゑのものにて侍りけむ身とも知らず、おやとこそおもひたてまつれ」

は、かくや姫のことばである。姫は後の打明け話よりすれば「へんぐゑの身に侍りし」ことは知つていた明白な事実であり、それを婉曲にいつたと見られるのであるが、話手の判断としては、これを想像的に表現したと考へるべきであらう。

史的考察 平安時代の用法は大時右のA・B・Cようであるが、

廻つて上代の用法も大体同じである。

(A) このみ酒を かみ鷄試むとは、そのつづみうすに立てて歌ひつつかみ鷄かむ

(B) 神風の伊勢の國にもあらましを、何しか宗計六君もあらなくに

山の名を言ひ終行とかも、佐用姫がこの山の上に領布を布利家無

(C) わが岡のおかみにいひて降らしめし雪の摧しそこに塵家武

(分五ノ八七二)

(分二ノ一六三)

(万二一〇四)

ただ時に関係のない現在の推量に用いられた「けむ」の例を春日政治博士は、万葉から二例挙げられる。(西大寺本金光明最勝王經の西大寺本金光明最勝王經)

誰が苑の梅にか有家武ここたくもさきて有るかも見が欲しきまで
(万二一〇三三)

時時の花は咲けども 何すれぞ母といふ万花の佐吉低己愛祇牟
(万二一〇四三三)

これが却つて古用かといわれる。しかし前歌は古義、略解のいう通りその前の歌に対する答と見れば、常用のようである。後者の一例のみで決するのはやや躊躇を覚える。

「けむ」は平安初期の訓点資料には少ないながら例が見える。(片かな交じり文にもある。)

ケむ

(西大寺本金光明経古点、勘春日博士釈文)

平安時代の和文、かな交じり文には盛んに用いられたが、中期以降の訓点語としては用いられていない。初期ほど精密な訓み分けをしなくなつて専ら「む」にその位置を譲つた為である。

中世に入つても鎌倉頃までは用いられたらしい。延慶本平家物語
(応永二七書字)には、

昔須達長者が四十九院ノ祇園精舎ヲ建テテ釈迦善逝ノ御供養アリ
ケンモ利益結縁ノミギリコレニハ過ジト目出シ

比較的多く主として地の文にあらわれる。しかし室町頃には天草本伊曾保、平家など吉利支丹本にも抄物にも用いられていないのによれば口語からは姿を消したと思われる。同意を「らむ」より転じた「つらう」が表わすようになったこともその原因の一つであろう。

但し文語や歌語としては引きつづいて用いられた。このことはロドリゲス「日本大文典」の記事でも伺うことができる。

○ 書物の講義で教へられるようにこれらの助辞はすべて書きことば用の種々な文体に使うものである。

○ Qui (き) Quan (けん) の二つの助辞は草子及び和歌に多く用ゐられるものである。(土井忠生博士談による)

文語として擬古的に用いられた「けむ」は、やがて平安時代の用法とは異なつた使い方をもするに至つた。江戸時代の例を示す。

されどかいなでのをみなあらねば、命長くて老にいたるまでもよみいでたらむには、いかばかりめでたき歌どもいできけむかし、
いとをしかりしことなり
(泊瀬筆話)

右は過去の事柄の想像というより、仮定想像として「まし」の用法と混じて用いられたものである。

付属形式「けむ」は動詞および助動詞と形容詞(カリ系)の連用形につく。

並浜ならべむとこそその子は阿利鶏梅(ありけめ)
けつのわくごの虚茂邏勢利祇牟(こもらせりけむ)
いかばかりかはあやしかりけむを
(紀)

時代が降るといかわゆる形容動詞の連用形についた例もある。
感陽宮煙片々タリケム
(延慶本平家)

上代には形容詞についた例を見ない。カリ系統のクとアリとの結合が不十分であつたからで、形容詞にはアリを介して付く。

東男の妻別れ 可奈之久安里家牟(かなしくありけむ)
(万二一〇四三三)

しかし形容詞的性格の助動詞「ず」には直ちに付く。

さやまたのをちがその日に母等米安波受家牟(求めあはずけむ)
(万二一〇四三三)

平安時代には「アリ」と結合した「さり」に付くようになる。
おこなひをも物語をもせざりけむ
(更級)

なお完了の助動詞の「ぬ」「つ」ともついた例があるが、「詞の玉緒」によれば「にけん」が常のことで「てけん」は少いという。

語源「けむ」の語源は、「け」(ヶ)に推量の「む」が付いた形と考えられる。推量の「む」については異論がないが、「け」が何であるかは確定していない。「む」が付くことより「け」は未然形であることは明らかである。この「け」の単独の例が上代に見えて

いる。
つぎねふ山城女のこくはもち打ちし大根根白の白ただむき麻迦受
祢婆許會知らずとも言はぬ (記・書記には「摩訶羅婆會」とある)
み酒をたげと伊比祢婆かもよ我が酔ひにけむ (常陸風土記)

右の「け」を「過去の「き」の未然形と言ひ、また動詞「来」の未然形ともいう。

前の例は打消の「ず」の下についている。「き」が「ず」の下にある確例はないが、万葉集で「心ゆも吾者不念寸(万四〇)」を「オモハズキ」と訓む説もあり、訓点資料にそう訓んだと思われる例がある。(拙稿「訓点資料に見える(スキ)の用法」未説定稿) 因みに、知恩院の大唐三藏法師表啓古点(初期)で築島裕氏(訓点誌と訓点資料4)は、

張一驚か望(み)シモ[而]博カラ非(ず)き (48行)

と訓んでいられる。ただこの場合は、ヲマト点で、ず・きの二点を加えたものであり、補読して、「ずありき」と読んだものかどうかは確定しない。そんなわけで、例が少いので決定できないが、もしスキの接続が可能であれば、「ズケバ」のケは「き」の未然形と見だ方がより妥当性があるまいかと思うが、これはなお将来考えて資料をあさつて行きたい。が、とにかく

麦がらの佐辞鶏区(さしけく)知らに (定規)
の「けく(タコト)」の「け」もそのようにも考えられ、「ずけむ」などの過去推量の「け」も同じものと思われる。しかもこれらの用

字はいずれも上代仮名遣では甲類の仮名であり、この点からも矛盾は見られない。更に意味より考えるに、先述のように、「けむ」を過去と推量との二つの働きに分析し「けり・む」「き・む」として考えたこともこの語源説を裏付けるものであり、(春日政治博士によれば「けり」の原義は継続であつて、古代にはこの方が多いといわれる。さすれば「けらむ」より「き(け)む」の方が可能性が高い)連用形に付属することも納得がいくようである。

「けむ」の語源をこのように考えると、活用が推量の「む」と同型であることも当然であろうと思われる。「けむ」の活用は次のように帰納される。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令
(けま)	○	けむ	けむ	けめ	○

未然形は、「く」に続く形のみで、奈良時代に少数例がある。うち歎き可多里家来久波(語つだらうこと)とこしへにかくしもあらめや (万十八ノ四一〇六)

この形は「む」における「まく」と同じものである。連用形の用例がない。「けむ」は最下位につく助動詞であるから、この下につく助動詞は意味上からもありえず、中止法も、助詞の「て」など付ける法も、中途は動詞のみで最終の語に助動詞「けむ」をつけければ事足りたために発達を見ずに終つたものであろう。終止形は自然のいきりとなる外、助詞をつけても用いる。

昇りけむ野辺は煙もなかりけむ (更敷)
仏もあはれと聞き入れさせ給ひけむかし (同右)
連体形は連体法の外、係助詞、「や・か・ぞ」、疑問語の結び、主格助詞の結びなどに種々用いられる。

五年、六年のうちに千年や過ぎにけむ、
準体法にも用いられる。

(主左)

むかしこはたといひけむが孫といふ

(更級)

已然形は「こそ」の結びとなり、また「ど」「ども」にもつづく。

返しは上手なればよかりけめど聞かねば書かず

(大和物語)

他の助詞にもつづく。

親なしに汝奈理鶏迷夜(なりけめや)

(紀)

そのつづみうすにたてて歌ひつづ伽弥鶏梅伽羣(かみけめかも)

(紀)

このみ酒のあやにうたのしきさ

後の例は後世なら接続助詞「ば」のある所であるが、平安時代以後にも「けめ」に「ば」がついた例は見ない。

たし

用例 「たし」は鎌倉時代の俗語であつて、奈良

(疑問例一例)、平安時代の文献には用例を見な

いというのが通説である。そして確かな古い例として、鎌倉時代の初、建仁元年(一一二〇)に行われた千五百番歌合の例歌とその判詞がしばしば挙げられる。それは藤原季能の歌(七百七十一番)「左の歌で、

いざいかに深山のおくにしをれても心しりたき秋のよの月

これには、定家の判詞がある。

左しりたきといへる雖聞俗人之語未詠三和歌之詞也(元祿

頃刊行本による。続々群書類従十四も同)

である。「俗人の語」とはどんな内容か明らかでないが、要するに、人士の通俗語ということに落ち着くようである。雅人に対する卑俗下衆の言葉ということではあるまい。つまりそれは、定家の考えである歌語の範疇外の言葉であつたのである。思うに、当時(鎌倉

初年)の口語であつたのであろう。管見によれば、この助動詞は、歌人・高僧の書簡、または口語をまじえた資料に散見してはいるが、いわゆる公式の文章語の資料にはほとんど見られない。定家の縁故の俊成女(建長六年(三五四製))は歌人として名高いが、その越部禪尼消息には、

新勅撰はかくれごと候はず候。中納言入道殿ならぬ人のして候はば、とりてみたくだにさぶらはざりしものにて候(中略)

ちやわんのものになるりをかけて候やうに、きよくうつくしうかたじけなくあぶぎて信もをこりおぼえて候。歌のことも申たく候事おほく候にこそ見参もしたく候へ

人はなどおりても申候ぬ。かやうにそゞろごといくらも申たく候(以上群書類従、九)

とあるが、東大寺の学僧宗性上人(建仁三年(一一二二)の書いた春華秋月抄草(仁治三年(一一四一頃)、現東大寺圖書館在庫)卷十二(墨付全紙廿三枚半紙四枚)第十一紙の紙背消息に、

これにはいたくみたき事も候はで候はぬ也

聞事の見たく候ハかく(?)候へき(中略)

京極殿師実閑白にならせ給

年かう 月 日 御年(中略)

又家忠公大臣になり候

ね

年かう 月 日 年 これの

承たく候と 宗性申候しるし

下され候哉 あす花山八講

の折同令申候也 恐 謹言

卅日

為継

など用いられているのによれば、口語としての存在を知ることができると。

また後世の書写に係るが建仁より三十年程遡る嘉応元年（一一六九）に成つた梁塵秘抄にも、

月影ゆかしくは南面に池を掘れ、さてぞ見る、琴のことの音ききたくは、北の岡の上に松を植えよ（巻二、岩波文庫六九頁）

の例がある。この書には「どこ・どれ・だく（抱）」など当時の口語の例のあることは知られているとおりで、

なお、覚録（一四三）の孝養集（天治二年、二二五）に、

…行きたきにも…とある。これは山田巖氏の教示によつたものであるが、たしかに早い時代の用例である。

その他、僧侶、神官の作になる和歌にもある。私撰和歌集の月詣集（貞永元年）には

あり所をわするる恋といふことをよめる 紀康宗
ききたしや宿をたどりてなくなみだ
わすれ水とやながれゆくらむ

があり、高弁（貞永元年）の和歌に

山寺モ法師クサクハ井タカラス 心キヨクハクソ（糞）フクナリト
（岩崎本「明恵上人歌集」による。同集は宝治二年上人の遺稿を弟子高信の集めたるもの。作は元仁、嘉禄ころか。「円珠庵雜記」には結局「糞ふくにも」）

と「あり」と合した例があり、つづいて次歌の詞書にも、

山寺ニスムナラヒ、ナニトナクヒマナキニ、ユナムドアマツレバ身
モクルシキヤウニテヤスミタキコモロモイデキヌベキヲ（下略、

同右）
がある。この集には和歌に二段活用的一段化した例（アラハレル）

があり、口語を特に詠みこんだものと思われる。前歌の作者は神官であり、同様に考えたい。事実、月詣集と前後する千載集にも、他の勅撰集などにもまた平安時代のそれらにもその例を見ない。（滝沢貞夫氏による。古今集と新古今については「日本古典全集による」同氏の作成された総索引によつて確かめた）

鎌倉中頃から 高僧の聞書・法語の類にも口語が多く使われるのが見られるが、次の歎異抄の例、

またいそぎ浄土へまいりたきころのさぶらはぬは、いかにとさぶらふべきことにて…いそぎまいりたきころなきものを…

も参考にならう。（岩波文庫本 永正十六書写本）

こう見てくれば、当時の説話物語にも例の見られることは首肯できる。宇治拾遺物語、沙石集（弘安六、二八三）の例はすでに知られており、

無住（一三二）の妻鏡には
自然ト念仏が申シ度テ、念々相統セラル、也。

といわゆる対象格を受ける用法が既に見えている。鎌倉末頃にはかなり広く用いられたらしく、延慶本平家物語には比較的多くの例を見ることができ、

イツクニモ父ノオワシマサム所ヘツ参リタキ。
何クヘ行合レタリトモ死バ一所デユソ死タケレ。

母ノ御許ヘ御文マヒラセタケレドモ筆ノ立トモ覚ヘネバ（吉沢義則博士校註本による）

更に、擬古文である徒然草にも散見することは周知のごとくである。我が前にすへぬればやがてひとり打食て、かへりたければ…カエリタケレバ…ひとりついたりちて行きけり（二〇）

家に有たき木は 松・さくら、松は五葉もよし（百三）

この語は漢文訓詁資料には、例を見ない。訓点用語の固定した平

安後半期にもまだ用いられていなかった新出の語であり、かつ訓読には「欲」などの他の表現が固定していたからであろう。変体漢文の用例は十分明らかにしていないが、往来物の中には、度の用字がある。種々の事情から考えて、「たし」と読まれたものかと考えらる。

雑訴風情許者、成管見之窺度候(往來歴制)

又自何御代。被安置候哉。承度候。(遊學往來)

當時上意様。歌道御稽古有度雖下被思召候上(東葉山消息)

これらは室町時代の例である。これより以前の鎌倉時代に、広く「たし」(度)が消息に實際用いられていたから、かような模範文例としての往来物にもその影響が現われているのであろう。ちなみに、かような場合、平安時代には、やはり「欲」の字を使つたのである。

明日参謝之次「欲」承蔽旨「雲言」(雲州消息)

さて消息文案の影響もあつてか、室町時代にも、消息には、鎌倉時代そのままの文語体の「たし」が用いられ、

さりながら漢句つまり候時などにて御句など付られたきやうにも候はば……

此近頃小鳥などあつめられ候て御すきのよしき度くこれた然るべからず候。(以上後花園御消息)

彼里藤沢辺に小庵を作候て十方且那にてありたく候(東野州消息)

江戸・明治を通り、現今の書簡文にまでその形式を残しているのである。

一方、室町時代の口語としては、語の形を変え、抄物・吉利支丹本によれば連体形のイ音便形「タイ」が広く用いられ、更に、その連体形が終止にも使われて、現代語の用法の大勢が出来上つていたことが分る。(「国語学辞典」付録「国語活用表語における活用参照」)

利へ因ヲトマシ軍兵ヲツヨクシタイト云レタソ(幸子抄)
また、当時の用法・意味の一面は、ロドリゲスの「日本文典」、コリヤドの日本語文典によつてもうかがうことができる。
活用・意味・付属形式 今まで掲げた諸例で分るよう、文語としての「たし」は、形容詞ク活用と同様の語尾変化を示している。

未然形	連用形	終止形	連体形己	已然形
(たく)	たく 「たう」 テ・候 たかり	たし	たき 体言 係結 (たかる)	たけれ ども・ば 係結

未然形「たく」は確例ではない。「たから・り」は助動詞に続く例のみで、連体形「たかる」の例は見ない。命令形は「たし」の意味より考えてどうしても有りえない。連用形のウ音便は、鎌倉時代にも見られ、

画はむかへたうもなきなり(谷百集、一)
抄物・吉利支丹物でも引きつづき用いられた。

魏ノ文公ノ古楽ヲキキタウモナカツタト同ソ(史記抄)
特にその打消の形はユリヤドの日本語文典(大塚高)にいうように「ともない」であつたらしく、(たうも↓たむ↓とむ・とも)これが現代語の「みつともない(見ともない)」の造語要素になつて見られる。

「たし」の意味は本来、話し手(言語主体)の願望を表わすものと思われる。ロドリゲスの「日本文典」(土井忠生)で他の希求法と區別して「第一人称にのみ用ゐる」といつているのは、この事情を考慮したものとと思われる。実際、鎌倉時代のその当初の用例の確かなも

のでは言語主体の願望を表わしている。第三者の希求する意を示すには、その語幹に接尾語「がる」をつけてラ行四段動詞して用いる語によつたと思われる。

故殿に年比候ひし某と申す者こそ参りて候へ。御見参に入りたがり候(宇治拾遺物語 五)

しかし時代が降ると、第三者の希求に「たし」を用いた例がある。

北条日来聞タカリツルニウレスト思テ(延喜本 平家)

或者子を法師になして……二のわざやうくさかひに入ればいよくよくしたく寛えて嗜みけるほどに、

当代いまだ坊におはしまし比……たゞ今御所にて紫の朱うばふことを悪むと云文を御覧せられたき事ありて御本を御覧すれども

つれく事

かかる用法は、「たし」の派生的の用法か本来的のものか、少い資料では急には決し難い。唯、推測するに、前掲の例で見られるように、会話、心話の部分の用法が、間接語法にいい直されたために「——たしと思え、言ふ」↓「——たく思え・言ふ」、言語主体の願望から第三者への希求に移つたものではあるまいか。更にこの用法を可能にしたのに「まほし」との関係が考えられる。

「まほし」は話手の願望も第三者の希求も表わす語として平安時代から用いられて、中世以後一般口語から次第に勢力を失ひ、やがて「たし」がこれにとつて代ると言われるが、「たし」の右の用法は、かかる事情のもとに「まほし」の影響とその消滅とに關係があつたのではあるまいか。なお後考に俟ちたい。

「たし」の付属するものは、動詞および「す・さす・る・らる」の連用形である。「す・さす・る・らる」につく例は管見では平家物語、徒然草以後であり、当初には動詞特に四段、上一、上二段など「イ」音の語についた例が多い。

研究史 「たし」は定家のいうように歌語にも縁遠く、中世以後の口語として用いられたので、中古語歌文の研究より起つた江戸時代の文法学者には顧みられなかつた。同時代の隨筆にも触れたものを殆ど見ない。ただ独り、倭訓栞で次のように説いている。助語にめでたし・うれたし・見たし・行たしなどいふはつよくいふ辞、痛しの義なり

明治に入つて「広日本文典」(徳語指)で「希フ意ヲ成ス志幾活用ナリ。見タシ・行キタシ・アリタシ(中略)其他ニ愛タシ・憂タシ・慕タシ(けぶたし・ねぶたし) (中略) (痛し・甚しの意) あれども用法極めて局せり」といい、形容詞を作る接尾語と説いている。右については次の二点に注目したい。第一は語性を接尾語とすること。第二は語源を「痛し」と見ることである。

「たし」を接尾語とする考えは明治時代に「広日本文典」以外にも行われていたが早く松尾拾治郎博士が助動詞と認められており、(国学院雜誌八)また山田考雄博士の複語尾説、松下大三郎、三矢重松博士の助動詞説があつて、以来諸家これに従つて来ている。近年、時枝誠記博士は言語過程説の立場から辞手の立場の直接的表現(原論)である助動詞から除外、形容詞的接尾語とされた。(国語学原論)「たし」に第三者の希求を表わす例のあることがその理由とされている(原論)現代語の例を挙げては、しかしこれらが本来の用法であるかは疑問であつて、もし転用されたものとするればなお再考の要があるう。

語源 語源についてみるに、倭訓栞に「痛しの義なり」と説き、また三矢重松博士は、

たしは語根いたしにて例へば行きたしは行きいたしの略なれば、此の語は助動詞にあらで形容詞なりと説くものあり(稿等日本文法)と紹介されている。筆者も「いたし」説について考えたい。

「甚なし(しいの古語)」「いたし(痛し・甚し)が造語要素とし

て幾つかの形容詞を合成したことは原注のことであろう。元来原註の「いたし」は「甚し」の意味で古事記上の

水穂国者、伊多久佐夜芸三有那理
などの用法が本来のものと思われる。そしてそれが、感覚の痛みの

意が生じたものであろうか。もつともその順序はとにかくとして、

万葉集にはすでに両義の用法がある。

かむなびのいはせのりよぶこどり痛莫鳴吾が恋ひまさる(万八
ノ四一九)

たましひはあしたゆふべにたまふれど安我牟爾伊多之恋のしげき
に(万十五ノ三七六七)

さて、今「いたし」に基づく合成語と思われるものを上代より中古

にかけて求めるると、

a うれたし らもたし つめたし

b こちたし らうたし けぶたし ねぶたし めでたし あきたし

c うもれいたし

などが拾われる。(a)は「――+痛(傷也の意)」によるもので

ある。「うれたし」は「うら(裏↓心)痛し」の音転であり、

「おもたし」は「うら」に対する「おも(表↓面)痛」ではあるまい

か。つまり狭母音のイの脱落があつたのであろう。更に「つめた

し」は「爪痛」と考えられないであらうか。これらはいずれも「痛」

に基づくために感覚的な概念を表わしている。(b)は「――+甚し」
によるものと考え、次第に転義して情意的意味を表わすようになつたものであろう。「こちたし」は「言甚し」の音転という。

他言は眞言痛成りぬともそこにさはらむ吾ならなくに(万十二ノ二八
八六、新校による)

ある。「らうたし」は「癡甚し」で「癡(野七・尾七ナセ) ぶ多し」
が原義であり、

なめしとおぼさでらうたうし給へ(源氏、桐壺)

の「可愛がる・可愛く思う」は情意的で転義ではあるまいか。同様

に

「けぶたし」(煙者、甚し)という(↓氣ヅマリダ、窮屈ダ
宮いと苦しき判者にも当たりて侍るかな
いとけぶたしやとなやみ給ふ(源氏、権甚)転義)

(くゆりつゝ世にすみかまのけぶたきを吹きつつ燃やせ冬
の風―會丹集―原義)

「ねぶたし」(「ねぶり甚し」か)↓ネムリタイ
夜深くねぶたくなりければ(枕草子―転義)

「めでたし」(「愛 甚し」という)↓(悪心することが甚
此の少将此の世の中にめでたきものにははれたり(源朝下)

「あきたし」(「厭甚し」という)↓ヨシニシタイ(ガ悪シイ)
さしあたりて見むには煩はしくようせずは飽きたきこともあり
なむや(源氏、帯木)

これらの個々が、音変化又は脱落をした時、および転義の時期は何

時であるか、不明であるが平安中期までには完成したのであろう。そ

れ故に(c)「うもれいたし」は新出の形と見るべきであらう。

「うもれいたし」(埋 甚し)↓心が晴レヤカデナイ
若き人のめでざらむもいとあまりうもれい(↓晴レヤカニナリタ
イ)たからむ(源氏)

これらは「言甚し」より考えるに、いずれも体言(動詞の連用形

も)相当語に「いたし」がついて音変化したものとと思われる。しか

もその意味は状態的屬性概念から次第に主観的、情意的な表現に移

つて行つたものであろう。特に「いたし」の上位語が感覚的な語

「ねむり・飽き」の場合はその傾向が一層強く、願望の意味をも持つに至つたと見られる。更に上位語が動詞の連用形であつたために、他の活用形(例えば飽く、飽か)との関係から「たし」を分出し、しかも願望の意味はこの語にあるがごとく見るに至つたのではあるまいか。こうして新しい意味を持つた新語形は、伝統を重んずる和歌の用語の類からは避けられ、まず口語として平安末、鎌倉初頃より使い初められ、次第にその用法と使用範囲を広くして行つたものと思ふのである。漢文訓読の用語は、平安中期に整つた体系をとつたから、それ以後に生まれた新しい言葉は受けつけなかつた。その伝統があつて、今日でも意味上から当然ゆるされるはずの「飲」などの字を「たし」とは訓読しないのである。その点では、変体漢文の系統の消息往來の用語とは自ら差異ありと考えられる。後者は新しい通俗語を撰取して、言語変遷の現實的動向に應じたわけであつた。

こう見てくると、源氏物語にある「飽きたし」(二例)の類はたとえ「たし」の母胎であると考えても、助動詞「たし」とは見ない方がよからう。それは他に「たし」が自由に動詞に付いた例もななく、また、一方に、「うもれいたし」のような造語が行われていたことよりしても「あきたし」を一語と考えるべきであらう。

最後に万葉集の疑問例について考へる。「たし」の例として

凡有者かかもせむをかしこみと振痛袖を忍びてあるかも(六ノ九)
が挙げられるが、時代を離れた唯一の個例であり、平安時代にも例を見ないために疑われて来たものであるが、筆者はこれこそ「たし」の源流を示すものではないかと思ふのである。同様例に、

丹生の河瀬は渡らずて行く行くと恋痛吾が弟こち通ひ来ね(三ノ一)
がある。共に「痛」が用いられていることよりすれば、コヒ(イ)タキ、フリ(イ)タキでその状態の甚しい様と見るべきであらう。

但し前歌は、「振る」という純然たる動作であるから、「甚しく振る袖を」では意味が通らなくなつてしまふ。「袖振る」に特別な情意的な意味があるのではあるまいか。島田啓子氏によれば(万葉集に於ける「袖振る」考)、万葉集の「袖振る」は單なる動作として歌う他に、強い感情表白の手段として「恋する」意に使われた。卷六(九六六)の詞書に「恋の歌」とも言うべきを「袖を振る歌」とあり「恋」の代名詞の如く使つているといふのである。さすれば「振痛袖を」は「甚しく恋しいのに(忍んでいる)」の意と見てはどうであらうか。「いたし」の作つた合成語は、実際には今日知られるよりも多かつたであらう。そしてその中のいくつかが永い間に転義し、やがてその一部から助動詞「たし」を分出するに至つたものと考えるのである。

なお、平安時代の「たし」の例として大言海には王生忠見集の夢をこそ寢覚の程に語りけめ、見たくまでにもなりにけるかなを挙げてゐるが、三十六人集翻刻本及び群書類従九には「みたて(御館か)までにも聞えけるかな」とあるから、疑わしいのである。(以上、小林芳規稿)